

聴き取り感じ取ったことを他教材の学びへ生かすための指導過程の工夫

新潟市立葛塚小学校

酒井 友梨 (平成 28 年度)

私の主張

現代の学校教育では、予測困難で変化の激しい社会に対応できる資質・能力の育成が求められている。変化に対応するためには、学習対象や内容について固有の知識・技能を獲得するだけでは不十分である。獲得した知識・技能を問題発見や解決に活用したり、知識・技能の活用を通して新たな知識等を獲得したりするなど、学びのつながりが重要である。

しかし、自身の音楽科の実践を振り返ると、児童は、教材曲固有の特徴について学びを振り返ることが多く、学んだことを既習事項と結び付けたり、以降の学習に生かせることの具体的な記述が見られたりすることは少なかった。

そこで、これまでの課題を改善するために、題材における指導過程の工夫が必要だと考えた。題材において初めに扱う曲を教材 A とし、ここで学んだ音楽的な見方・考え方を、2つ目の曲となる教材 B に生かす指導過程を工夫する。学習指導要領では「音楽的な見方・考え方とは、『音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること』であると考えられる。」とある。教材 A で聴き取り感じ取ったことを生かして教材 B の学びを深め、表現を工夫する児童の姿を目指して、本実践を行った。

1 はじめに

(1) 主題設定の理由

音楽科では、題材ごとに「表現領域（歌唱・器楽・音楽づくり）」と「鑑賞領域」の教材曲が設定されている。題材で身に付けさせる力が児童に定着するよう、教師が必要な教材を選択し、題材を構成する必要がある。教材曲を演奏したり歌ったりすることだけができる「教科書を学ぶ」ではなく、教材曲の学びを通して、学習指導要領で求められる力を獲得する「教科書で学ぶ」という視点が重要である。

私の過去の実践では、「題材を通してどのような力を身に付けさせるか」を考え、児童の実態に適した教材曲を教師が選択し、授業を行ってきた。しかし、教材曲の終末の振り返りでは、「うまく演奏できてよかった。」や「鑑賞曲で分かったことは・・・」など、情意面や自己の表現、学習内容に関わる記述にとどまっていた。

これらの児童の実態から、児童にとって「思考力・判断力・表現力等」の力に関わる学びが不十分であり、教材同士のつながりを児童自身が自覚できる題材構成の工夫が必要だと考え、主題を設定した。

(2) 研究仮説

題材の指導において教材 A で気付いたり捉えたりしたことを、教材 B に「当てはめる」指導過程の工夫をすると、児童は、教材 B で教材 A の学びを生かしながら「考えて表現をする」ことができるだろう。

(3) 研究の内容

- ①方法 「気付く・捉える」、「当てはめる」、「考えて表現をする」という一連の指導過程を取り入れた題材を構成し、授業実践を行い、児童の姿から成果と課題をまとめる。
- ②対象 新潟市立葛塚小学校 5年1組 40名(男子21名 女子19名)
- ③題材 「音の重なりを感じ取ろう」、「いろいろな音色を感じ取ろう」、「曲想の変化を感じ取ろう」

2 実践の実際

(1) 実践1「音の重なりを感じ取ろう」

①題材の流れについて

表1は、「気付く・捉える」、「当てはめる」、「考えて表現する」の一連の流れについて表したものである。児童は鑑賞曲「アイネクライネナハトムジーク第一楽章」で、曲想の変化を捉え、曲想の変化の理由を考えた。「①同じ旋律を演奏」、「②2つのパートが違う旋律を演奏」、「③ずらして演奏」の3パターンの音の重なり方があることやその重なりの違いによって曲想が変化することに気付いた。次に、歌唱「いつでもあの海は」を、「音の重なり」という視点で聴き、鑑賞曲の①②③の重なりがあることにも気付いた。そこで、教師から、「鑑賞曲で『同じ旋律を演奏』部分で力強い感じがしたから、歌唱曲の『同じ旋律を演奏』の部分を力強く歌おう」と提案した。

表1 「音の重なりを感じ取ろう」 段階的な学習活動

	教材A ①「気付く・捉える」	②当てはめる	教材B ③「考えて表現をする」
教材曲	鑑賞「アイネクライネナハトムジーク第一楽章」	「アイネクライネナハトムジーク第一楽章」の「『①同じ旋律を演奏』の部分は力強い感じ」の曲想を、「いつでもあの海は」の「同じ旋律を演奏」の部分の歌い方に当てはめる	歌唱「いつでもあの海は」
学習内容	<ul style="list-style-type: none"> 曲想が変わる3つの場面がある それぞれの場面で曲想が変わる理由に、「音の重なり」の違いがある それぞれの重なり方の場面での曲想を捉える 		<ul style="list-style-type: none"> この曲は「同じ旋律を演奏」の部分で「力強く演奏（歌う）」では合わない 曲に合った歌い方がある 曲に合った歌い方を考え、工夫をして歌う

②教材Bに関わる授業の様子とふり返りの記述

「アイネクライネナハトムジーク第一楽章」の曲想を「いつでもあの海は」に当てはめたことで「その曲に合った歌い方をするとよい」と発言はあったが、曲に合った歌い方とはどのようなものか決める手がかりがなく、児童には歌い方について困り感が残った。

表2 「音の重なりを感じ取ろう」 教材Bの表現活動後の児童のふり返り

(A児) その曲に合った感じを考えて歌うとよいと分かりました。
(B児) 3つの場面によってちがう歌い方をすることが難しかったです。
(C児) どんな感じで歌うとよいか思いつかなかったので、これからの歌でもっと頑張りたいです。

③成果と課題

表3 「音の重なりを感じ取ろう」 成果と課題

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> 2つの曲を「音の重なり」という視点で比べることで、曲の構成に気付き、捉えることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 曲想は、その楽曲がもつ固有のものであり、異なる2曲で曲想の当てはめることは不適切だった。 歌唱における重要な要素である「歌詞」に着目し、意味を解釈する活動が不十分だったため、歌詞を大切にしたい表現の工夫ができなかった。 器楽曲で気付いたことや捉えたことを歌唱での表現につなげる指導過程は、「歌詞」等の要素の違いがあることから、難しさが残った。

表3のとおり、教材Aで聴き取った音楽を形づくっている要素「音楽の縦と横の関係」の視点で教材Bの構成を理解することができた。しかし、器楽曲の学びを歌唱曲に生かすことが難しい点が大きな課題となったので、実践2では、2つの教材のつながりが実感できるように、教材Aと教材Bをどちらも器楽曲とする。

(2) 実践2「いろいろな音色を感じ取ろう」

①題材の流れについて

まず、児童は「リボンのおどり」で様々な音の重ね方を試しながら、「曲想の変化と音の重なりに関わり」と「音楽の仕組み」（反復、呼びかけとこたえなど）に気付いた。次に「祝典序曲」の鑑賞で主役の楽器を確

かめながら「曲想の変化と音色の関わり」を捉えた。2つの音楽を形づくっている要素（音楽の仕組みと音色）の工夫を教材Bの音楽づくり生かした。

表4 「いろいろな音色を感じ取ろう」 段階的な学習活動

	教材A ①「気付く・捉える」	②当てはめる	教材B ③「考えて表現をする」
教材曲	器楽「リボンのおどり」 鑑賞「祝典序曲」	音楽を形づくっている要素（音楽の仕組み、音色）を工夫することを当てはめる	音楽づくり「打楽器のリズムアンサンブルづくり」
学習内容	器 楽器の重ね方（音楽の仕組み）と曲想の関わり 鑑 主旋律の楽器の変化と曲想の関わり		・自分たちのイメージに合った音楽に合う音色の楽器を選んだり、3人でパートの重ね方を工夫したりする

②教材Bに関わる授業の様子とふり返りの記述

曲想を、「リボンのおどり」ではパートの重ね方、「祝典序曲」では音色と関わらせて学習した。そのため、教材B（音楽づくり）で、これまでの勉強から生かせることを問うと「音色」と「重ね方」の工夫についての発言があった。しかし、「パートの重ね方を工夫することは分かったけれど、どのように重ねたらいいか分からない」という困り感が生まれたため、反復や呼びかけとこたえなどの仕組みが分かるようなモデル演奏を提示した。児童は、モデル演奏で使われた仕組みを生かしながら、イメージに合う音楽づくりを行った。

表5 「いろいろな音色を感じ取ろう」 教材Bの表現活動後の児童のふり返り

(D児) どうすればはっきりと「盛り上がり」が分かるようになるか、みんなで考えて決めました。
(E児) 悲しい感じにしたいときは、トライアングルが一人で演奏するといいいのかなと思いました。
(F児) 一人が演奏して二人がこたえて、それからみんなで重ねるなどいろいろな工夫をしました。

③成果と課題

表6 「いろいろな音色を感じ取ろう」 成果と課題

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> ・「リボンのおどり」で、児童がグループごとに重ね方を工夫し、その実際の演奏を学級全員で「どんな感じがするか」と考えたことで、演奏をしながら重ね方と曲想の関わりに気付くことができた。 ・器楽曲の学びを器楽曲に生かす構成で、工夫の視点が明確になった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の仕組みの工夫をすると分かっていても工夫の仕方に迷った児童が多く、よいモデル演奏を示し、具体的な工夫を示すことが必要だった。

器楽曲から器楽曲へ学びを生かす構成にしたことで、聴き取り感じ取ったことを表現に生かすまでの学習が円滑に進んだ。「音楽づくり」で、「工夫の視点は分かったが、どのように工夫するかが分からない」という児童の実態が見られたため、モデル演奏を示したことは有効だった。実践3では、教材Aそのものがモデルとなるように、提示の仕方や指導過程を工夫したりするなどの改善を行う。

(3) 実践3「曲想の変化を感じ取ろう」

①題材の流れについて

まず、既習曲「すてきな一歩」の学び直しを行った。伴奏のみの演奏を示すと、児童は、曲想の変化によって3つの場面に分けられることに気付いた。次に、各場面の曲想を捉えてから範唱を示した。児童は音楽を形づくっている要素（リズムや旋律など）や歌詞との関わりを考えた。「夢の世界を」も同じ流れで学習した。

表7 「曲想の変化を感じ取ろう」 段階的な学習活動

	教材A ①「気付く・捉える」	②当てはめる	教材B ③「考えて表現をする」
教材曲	歌唱「すてきな一歩」	曲で一番伝えたい部分が伝わるような歌い方の工夫をすること	歌唱「夢の世界を」
学習内容	<ul style="list-style-type: none"> ・3つの場面の曲想を捉える ・曲想は音楽を形づくっている要素（リズム、旋律など）や歌詞と関わっている ・曲で一番伝えたい部分に着目して歌い方を考える 		<ul style="list-style-type: none"> ・2つの場面の曲想を捉える ・曲想は音楽の様子（リズムなど）や歌詞と関わっている ・曲で一番伝えたい部分に着目して歌い方を考える

②教材 B に関わる授業の様子とふり返りの記述

「夢の世界を」で曲想と音楽を形づくっている要素や歌詞との関わりを捉えた児童に歌い方を問うと、「もっと曲に合った歌い方をしたい。」という発言に続いて、「『すてきな一步』と同じように考えると、よい歌い方になる。」と学習方法を提案する児童の発言があった。他の児童も「すてきな一步」の学習方法を生かすことに同意したため、曲の一番伝えたいところを考え、その部分が伝わるように歌い方の工夫を考えた。

表 8 「曲想の変化を感じ取ろう」 教材 B の表現活動後の児童のふり返り

(G 児) 「すてきな一步」と同じように、場面によって曲の感じが違うことを意識して歌いました。
(H 児) 一番伝えたいところを元気に歌って、その前を少し小さい声で歌うようにしました。
(I 児) 曲の題名と同じ歌詞が一番大切だと思ったので、それが一番伝わるように歌いました。

③成果と課題

表 9 「曲想の変化を感じ取ろう」 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ・曲想を捉えさせる際に、「伴奏のみ」と「歌詞を伏せた伴奏と旋律」の 2 種類の演奏を提示したことで、音楽を形づくっている要素（リズムや旋律など）に気付くことができた。 ・曲想を捉えてから歌詞に出合うことで曲想と歌詞の関わりに着目できた。 ・「曲の一番伝えたいところ」を共有してから工夫を考えさせたことで、「何のために工夫を考えるか」が定まった。 ・歌唱曲の学びを歌唱曲に生かす構成で、工夫の視点が明確になった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「夢の世界を」の後半部で「明るく歌う」と表現を決めても、強弱などの具体的な歌い方について考える児童が少なかった。

実践 2 と同様に、教材 A と教材 B を歌唱曲に限定することで、教材 A で聴き取り感じ取ったことを教材 B に生かす学習の流れは円滑に進んだ。また、教材 A の学び方を教材 B に当てはめたことで、教材 A そのものがモデルとなり、教材 B の歌い方の工夫を決める際に生かすことができていた。一方で、「明るく」や「前向きに」と思いをもっても、強弱などの具体的な歌い方に言及することはできていなかった。

3 まとめ

(1) 成果

教材 A で気付き、捉えたことを教材 B に「当てはめる」までの指導過程は、教材 A で音楽を形づくっている要素に気付くことができると、それらを活用して教材 B を理解したり、表現を工夫したりすることができる。また、学び方を当てはめることも、学習過程が円滑に進むことが分かった。3 つの実践を通して、教材 A で聴き取り感じ取ったことを教材 B に生かすために、教師は、2 つの教材をどのような学びでつなげ、どのような表現ができる児童を目指すかを考えて題材を工夫することが大切だと分かった。

(2) 課題

本実践を通して、教材 B の表現において、表現の方法についての指導を充実させることに課題が残った。実践 3 の歌唱曲での表現活動では、児童が「このように歌いたい」と思いをもっても、強弱を工夫するのか、言葉の発音を意識するのかなど、具体的な歌い方にまで言及することができなかった。思いや意図に合った表現をするためには、具体的にどのように歌ったり演奏をしたりするとよいか、児童自身が考え、表現に生かすことができるよう、指導を工夫する必要がある。

4 今後に向けて

今後の題材でも同様の指導過程の工夫を行いながら、教材 A でどのような要素に気付くことが、教材 B での表現活動を充実させるのか、探っていく。また、課題として残った表現についての指導の在り方についても検討し、工夫を重ねていきたい。